

## 1 運動としての都市デザイン

### (1) 都市空間の質的価値

都市づくりには、そこで営まれる様々な活動や生活にとって必要な、機能性、利便性、安全性、快適性などを確保するための基盤整備が求められる。しかし、その量的な対応において、特に経済性との関係で、生活環境の快適性や都市空間の魅力や個性といった質的な価値については、これまで弱い立場に置かれ、事業推進上はマイナス要素としてさえ受け止められてきた。

市民のもつ価値観や計画設計技術の問題などもあって、経済性、機能性などの価値が優先される中で、多くの場合こうした質に関わる価値への配慮は不十分なものであった。

近年、こうした価値の重要性については認識されるようになってきたが、一般的にその実現策は、街づくりの計画論や事業のプロセスに適切に組み込まれてはいない。

都市空間の形成に関わる具体的な行為は、ほとんどが個々の施設ごとの事業として行われる。それぞれの事業だけでなく、全体の構成を計画しコントロールする仕組みや制度なども、空間や環境の質についてはきちんとフォローされるようになっていない。

横浜の都市デザインの活動は、こうした価値を実際の街づくりの中に盛り込むために実践する、運動としての性格をもった取り組みとして行われてきた。

### (2) 都市デザインの実践活動

横浜が「都市デザイン」といって目指してきたことは、様々な主体が街づくりに参加し、協働する関係をデザインして、市街地における公共空間が、市民生活の場として快適であるとともに、個性と魅力のある、質の高い都市空間を形成することである。

都市空間の質的価値を守り、育て、創造するには、街づくりを総合的にとらえようとする取り組みによって実現に結びつく。そしてその取り組みは、街づくりのプロセスを通しての活動が必要である。現実の街づくりの中で、この目標を実現するための実践活動に取り組みはじめてから、四半世紀が経った。

その時々で変化する、横浜の街づくりをとりまく様々な状況に対応して、取り組みの方法や内容は変化しているが、活動は継続してきた。それは理想としてイメージするプロセスや結果とは、常に一致するものではなかったが、それなりの成果もあげてきたと思う。

多くの人々のエネルギーを飲み込み、呼吸し、活動し、姿を変えながら生き続ける生き物としての巨大都市の中であって、それらは、現実の街づくりにおける地道な努力と格闘の結果であるが、ささやかな痕跡のようなものかもしれない。しかし、多くの自治体がこうした街づくりに取り組む流れを、大きく導く役割を果たすこともできたのではないかと思

う。

しかし、都市デザインという言葉やその活動の意味と内容については、街づくりに取り組む人々の間で、まだ十分に共通の理解と認識になっているわけではない。

## 2 デザインとしての都市デザイン

### (1) 物づくりのデザインと都市デザイン

通常、何気なく「デザインがいい」などという時のデザインは、物のかたちなど、表現されたものをさして使われていることが多いのではないかと思う。

こうしたデザインという言葉の延長上に都市デザインも受け止められ、その業務について誤解されていると思うことが非常に多い。

日本語の「デザイン」とは、例えば広辞苑によると「① 下絵。素描。図案。 ② 意匠計画。生活に必要な製品を制作するにあたり、その材質・機能・技術および美的造形性などの諸要素と、生産・消費面からの各種の要求を検討・調整する総合的造形計画」とある。持ち運びの可能な物の「物づくりに伴うデザイン」であり、完成形としての「物」が存在するデザインである。インダストリアルデザイン、ファッションデザイン、グラフィックデザインなどがそうである。

しかし、都市の空間づくりのデザインは、この物づくりのデザインとは区別して理解する必要がある。

それは、大きく三つのデザイン行為に分けて考えることができると思う。

#### ① 施設のデザイン

一つ目は、都市環境を構成する建築や土木施設などの、いわゆる不動産施設を対象にしたデザインで、建築デザイン、シビックデザイン（土木施設）、ランドスケープデザイン（公園緑地）、パブリックデザイン（ストリートファニチャー）などである。

これらは不動産以外の物とは違い、土地に定着して環境の一部となる。そのために、公共空間の一部として、デザインの結果に公共的な役割が求められる。そのため、デザインプロセスも異なるはずである。

しかし、実際にはこの違いがあまり意識されることなしに、多くの施設が計画、設計、管理されていると思われ、都市空間の混乱につながる大きな要因の一つになっている。

再開発やキャンパス、住宅団地なども、単一の事業主体、設計主体によるプロジェクトのデザインは、規模が大きくともこの範疇に入る。

#### ② 空間のデザイン

二つ目は、「施設と施設の関係のデザイン」である。それぞれの施設のデザインはそれぞれに主体性があり、それらの施設が組み合わされて形成される「空間のデザイン」である。

「調整のデザイン」ともいえる。

複数の事業者が参加し、一定のプロジェクトとして完成形を計画、設計する行為が、これ

に当たる。

都市デザインは、こうした行為を含んではいるが完成形をもたないため区別したい。

### ③ 都市デザイン

三つ目が、都市デザインである。姿を変える都市空間を扱うデザインであり、いわば四次元のデザインであり、変化する空間のプロセスのデザインともいえよう。

そして、その空間は都市の公共空間であり、市民の都市生活の場である。

「施設のデザイン」や「空間のデザイン」と異なり、このデザインは一般的には完成形をもたないため、一定の地域や地区を対象に、時とともに変化する状況に対応しながら、継続して行うデザイン行為である。

デザイン行為としての都市デザインは、かたちとして表現されるものはあるが、それは変化するものとして捉えておく必要がある。

そのため、このデザインは、都市の動きとともに、活動が継続されていなければならない。都市デザインは、こうした意味で、物づくりや施設づくりに伴うデザイン行為と同じ認識と方法で扱うことは出来ない。

## (2) 市民と都市デザイン

横浜市の都市デザインという言葉は、もともとは英語のアーバンデザインの日本語訳である。しかしアーバンデザインは、ヨーロッパとアメリカではその意味が違うようであるし、アメリカでも幾通りかの解釈があると聞く。日本の専門家の間でも、立場や人によってその理解は違っている。

横浜では、市民的にも共通の認識と理解を得ようと、その目標に沿って実践活動を積み重ねているが、まだ共通のものになっていない。

1994年に、都市デザインの推進を図るための制度を検討するために、魅力ある街づくりについて広く市民の意見を聞こうと、アンケートやヒアリング、市民フォーラムなどを行った。

その中で都市デザインの言葉についても市民の認識を聞いてみた。

市民の中から無作為抽出によるアンケートでは、約半数の人が都市デザインという言葉を知ったことがあり、2割の人が内容を知っているという結果であった。

また、街づくりに関わる各種団体に対するヒアリングでは、都市という言葉がハードや、都心部をイメージするという意見があった。

そして、比較的こうした問題に関心のある市民が集まった市民フォーラムの参加者の間では、「良い言葉だから使っていくべきだ」という意見と、「具体的でなく分かりにくいから別の名称が良い」とする意見がほぼ半々であった。そしてまた「ハードだけでなくソフトも考えた街づくりを市民サイドの発想で進めてほしい」「堅いイメージで専門家の言葉」「都心部だけで郊外部が対象になっていない」「広い内容を含み街全体を考えること」「もっと言葉のPRをすべきだ」などの意見も出された。

都市デザイン活動についての横浜市民の認識はこのような状況にある。そして、様々な分

野の専門家の間でも、都市デザインについての共通認識は得られていないと思う。

### (3) デザイン行為としての都市デザイン

そこで、都市デザインについて、デザイン行為としての特徴を考えてみる。

#### ① 都市生活の場としての公共空間のデザイン

都市デザインの対象は、都市や街の公共空間であることにより、デザインのプロセスや成果は、物づくりのデザインと異なる。

その形成のプロセスに、不特定多数あるいは特定多数の人々が直接、間接に何らかのかたちで関わるとともに、それらの人々が利用する都市生活の場のデザインである。

そのためその内容は、より多くの人々に対する説得力が求められる。

地域的、時間的文脈、あるいは物理的、社会的、経済的、文化的文脈との関係が重要である。

個別の計画や事業は、それぞれの事情や背景のもとに進められるが、全体の環境としては都市と市民生活の両方の視点からの要望と評価を受けなければならない。

都市の視点からは、都市全体の機能、経済、社会、環境などとの関係に対して、一定のバランス関係をもって位置づけられるか。あるいはその可能性をもっているのかといったことなどが問われる。

また、市民生活の視点からは、公共空間における機能性、経済性をふまえながら、そこでの快適性、人間性、文化性、地域性など、生活の場としての質に関わる内容が、より多くの生活者に支持される内容をもっているかが問われよう。

こうした視点のないデザイン行為は、都市や街にとって不幸であり、無責任である。

都市デザインは、こういった視点に立ったデザインである。

#### ② 複雑な要素の総合性を目指す関係と調整のデザイン

都市の構成要素は多種多様で、それぞれにデザインの主体性があるために、全体としてのバランス関係をどう求め、どう図るかは複雑である。

都市の活動は活発化し、その関係は複雑化し、スケールは巨大化してきた。専門領域の分野や社会における立場は多様化、細分化、縦割化し、より総合的な取り組みや判断を行うことは、ますます難しい状況になってきていると思う。

それに対して、都市空間や都市環境の質の問題や育成に関する理解や認識は、それぞれの縦割の領域での理解に止まっているように思うし、そのための計画論も不十分であり、未熟である。

横浜が都市デザイン活動として目指してきたことの一つは、こうした様々な縦の関係を横に繋ぎ、相互の関連と調整を図って、質的価値を伴った総合化を目指そうとするものである。そして、個々の個性が発揮され、なおかつ全体として一定の調和関係による魅力や特徴が形成されることを目指している。

その内容や方法は、地域や地区などの街を取り巻く様々な状況や背景によって異なる。

また、その総合化のプロセスには、様々な分野にわたる技術的、文化的要素だけでなく、経済的、社会的、政治的力学などへの対応も求められる。

単に設計過程でのデザインの調整だけでなく、それぞれの施設や空間の、計画、事業、維持管理、運営、利用などに関わる諸問題の調整やフィードバックなども必要である。

そのためにバランスを図る具体的な活動が必要であり、重要である。

その行為は、街づくりのプロセスを通して位置付けられていなければならないが、一般的には、そうした認識はされていないし、ほっておけば誰も行わない。そして、条例や協定などの制度があると無いとに拘らず、街づくりの中でこの実践活動は行われる必要がある。特に具体的に空間を決める場面では、この役割が重要である。

### ③ 変化する都市空間のプロセスのデザイン

一般的には、施設や空間の質を決定する行為は、「物づくり」のプロセスにおいて具体的な「かたち」にまとめあげる設計レベルのデザインにあると考えられている。

施設づくりにおいて、完成形としてのバランスや形態的価値を決定する設計行為としてのデザインは最も重要である。その腕力によっては空間に対して強い影響力を持つこともある。

しかし、施設はそれぞれに、企画、計画、事業、設計、維持管理、運営、利用、補修改修、増改築などのプロセスがある。都市空間は、そうした様々な状況にある施設の組み合わせによって形成されているため、常に変動している。

都市デザインの行為は、この変動する空間を前提にバランスを考える必要がある。

そのため、つくるだけでなく、守り、育てるというメンテナンスの視点が必要である。

そして、変化する都市空間のプロセスを通じて、継続的にデザインするという活動が行われていなければならない。

都市空間の質の向上を図るには、設計上の完成形としての問題としてだけで理解したり、評価するだけでは、基本的な解決にはならない。

都市デザインは、現実の街づくりにおいてこのことを実践する活動である。

### ④ 地区にこだわり、その文脈をつくるデザイン

人々が営む都市生活のベースは、地区レベルの街が基本になる。

そのため、全体としての都市側と、個々の施設側との計画、事業、設計などが、地区において整合性が図られ、質の高いバランスのとれた市街地空間と生活環境が形成されることが大切である。

しかし一般的に、都市計画は、多種多様な立場の不特定多数が生活する都市全体について、その機能と秩序を確保し維持するために、全体的な視点から都市や街や施設を見ている。一方、道路や建築など様々な都市施設の事業は、個々の施設側から都市や街を見ている。そのため、地区において進められる様々な事業を、街づくりの目標に沿って調和するように、地区の立場から調整を図る必要がある。

今までは、その間にたって、地区や街の視点から都市や施設を見る役割と立場が弱かったといえよう。地区にこだわり、地区を見守りながら、その文脈や市民生活の視点を通して、

都市と施設、全体と個々をつなぎ、地区としてのバランスを図る活動が、継続性をもって行われる必要があり、これが都市デザインといえる。

創造性に富んだ新しい視点や感覚も、このフィルターを通して地区の中で生かされ、地区の個性や魅力に結びついていく。

### ⑤ 街づくりへの参加と協働のデザイン

そして、都市デザインは街づくりに関係する様々な主体が、街づくりに「参加」し、その目標に沿って「協働」して進めるデザインといえる。

それぞれの施設の事業主体、管理主体などによるデザインは個別に行われるため、お互いの関係性に欠ける。公共、民間を問わず、基本的には縦割りの関係にある。

しかし、それらは地域や地区の空間や環境の構成員として、それぞれが個性を生かしながらも、街づくりへの参加意識を持ち、全体の目標に沿って協力し合う関係が必要である。

都市の中の一部に、例えば小布施の街並みや代官山ヒルサイドテラスの取り組みのように、個別の立場から環境形成に対する配慮を伴った積み重ねがなされ、総体として質の高い環境を築いている事例もある。しかし、こうした個々の施設の立場だけの努力では、都市空間のデザインを推進するには限界がある。

一方で、都市との関連から、地区全体としての価値を創造、保全、育成するために、相互を連携させてバランスを図る、創造行為としての調整活動が伴わなければならない。

そしてまた、づくり手としての市民と、使い手としての市民の要望を把握し、デザインとして成立させることが問われる。そのため、健全なパートナーシップの街づくりが求められ、そのデザインプロセスに市民参加が組み込まれる必要がある。

こうした全体の関係に対する共通認識が成り立つことによって、それぞれの「物づくり」の立場での質的向上を図る姿勢が生きてくる。このような参加と協働のデザインを推進することが、都市デザイン活動の重要な役割の一つである。

こうした意味でも、自治体の果たすべき役割と責任が大きい。

## 3 自治体行政としての都市デザイン

### (1) 自治体の役割

物理的に都市空間を形成する具体的な事業は、一般的には公共事業、民間事業ともに施設別に分解され、それぞれ異なった主体によって進められる。そして形成される公共空間を、公共的視点で総合的に計画し、誘導を図ることが可能な立場は、地方自治体にある。

しかし複雑な市街地を、空間や環境として、質の問題まで含めてきめ細かくどのように計画や誘導出来るかの手法は、十分に解明されているわけではない。そして、それを推進するための仕組みや制度も十分ではないが、いずれにしろ現場を抱える地方自治体は、行政として街づくりに対する責任がある。実際の街づくりの中で都市デザインに実践的に取り組み、それぞれの都市や地区の状況に応じた知恵と工夫によって、成果に結び付ける努力を積み重ねる必要がある。

しかしこうした取り組みは、特に「都市景観」という言葉が視覚的、形態的な側面を表現していることもあり、表面上の化粧術のように思われていたり、縦割りの分野の一つとしてとらえられてしまうことが多い。そのためあって、街づくりの中で、本来果たすべき機能を発揮できるような、役割や体制が十分に得られていないのが、多くの自治体の実態ではないかと思われる。

全国の自治体の景観行政担当が、最近、「都市デザイン」といった名称にするところが増えているが、表層の化粧術ではなく、街づくりに創造的に関わり、実績をあげていこうとする意志の表れではないかと思う。

## (2) 体制の整備と人材の確保

都市デザインの取り組みを行うためには、まず自治体の中に継続的にその活動を行える体制の整備と、人材の配置が必要である。制度や財政的なバックアップも勿論重要であるが、それ以上にどう活動するかが重要である。制度とその事務的処理だけで解決する問題ではない。制度があっても、運用に心が伴わなければ生きたものにならない。

新しい価値の創造は、確かな目をもっていれば、些細に思えるようなことも諦めずにエネルギーを注ぐことが大切である。地道な努力を途中で諦めれば、その時点で白紙に戻り、何も変わらない。その成果によって初めて価値が認識され、理解され、広がりをもつことにある。都市デザインの活動は、そうした面が強く、その意味では人によって支えられる部分が非常に大きい業務だと思う。

こうした意味で、自治体の都市デザイン行政の推進のためには、適切な体制を組むことと同時に、人材をいかに確保し、育成するかが重要な鍵である。

しかし学問の専門分野は縦割りで、部門を上げたり、部門の中を詳細に深めていくことは行われているが、有機的で生き物のような都市を相手に、様々な分野や立場の総合化を目指す視点で進める都市デザインの研究や教育は、なかなか難しいのではないかと思う。

また一方で、都市デザインに対する自治体の取り組みの姿勢が一般的に弱く、人事などのシステムもこうした活動に興味をもつ者が魅力に思うような状態にない。

このように人材の育成や確保は難しい環境にあるが、自治体の中で、こうした業務に興味と能力をもつ職員がその立場につき、実践の中で学ぶことは有効な方法の一つと考えられる。

そしてまた、行政、民間、教育などの様々な立場間で、人事交流が活発に行われるような社会になると、全体の関係に対する共通認識も得やすくなり、状況はかなり変わってくると思う。

横浜市では、都市デザイン活動に取り組んだ当初の頃に、外部から人材を登用した。また最近では都市デザインを含めた専門職の制度を設けたり、他自治体の職員が横浜市の都市デザイン行政を研修することも行っている。

## (3) 多様な取り組み

1992年に開催した「ヨコハマ都市デザインフォーラム」において、世界各都市での取り組みの報告では、それぞれの状況に応じた工夫と、様々な試みを行っている様子が伺えた。素晴らしい成果は一朝一夕に成されたものではなく、それぞれに多くの人々の努力や工夫、苦勞などが積み重ねられた結果である。単なるシステムの運用や、上辺だけの取繕いやテクニクでない、継続性をもった真摯な取り組みと人々の英知とエネルギーの集積の成果であることが分かった。

日本の現在の街づくりにおいて、こうした取り組みを行う立場は弱いが、都市空間の個性と魅力や、都市生活の快適性の実現にとっては重要な活動である。そして、現実の街の状況は、地域や地区によってまちまちであり、都市デザイン行政の取り組み方もそれに依じて一様ではない。

地区の空間の質に関わる文脈と、生活環境の質に関わるテーマを切り口に、街づくりに取り組む姿勢と立場があれば、きっかけとなる機会は様々にあるはずである。

地区の視点では、ニュータウンや再開発などのプロジェクトで、街づくりの企画段階から推進できるものは、骨格の計画や関係者の組織化などをはじめ、街づくりのプロセス全体に亘って都市デザイン活動を進めることの可能性をもつ。しかし、ほとんどは既存の街で白紙から計画するわけではない。また商業、業務、住居などの地域の性格によっても、その方法は異なる。

市民や住民の街づくりへの建設的なエネルギーをベースにして取り組むことが望ましいが、何らかの公共事業をきっかけに展開を図ることも一つの方法である。周辺への配慮や展開を含め、その施設の計画や事業、設計、管理運営のプロセスを通じて、都市空間の価値の創造を図る可能性を探ることが重要である。

街にそれなりの蓄積や特徴がある場合は、その価値を保全活用する視点から、様々な事業や活動の、調整や誘導を中心にした取り組みになる。

テーマの視点については、横浜では7つの視点としているが、例えば、水や緑、歴史や文化、歩行者や賑わい、美しさや分かり易さなどといった、それぞれの都市や地区において、空間の個性や魅力に結びつく価値を取り上げ、それを擁護し創造する立場から、様々な事業を誘導し、調整することから、街づくりを展開することが可能である。

いずれにしろ、個別に行われている事業を、地域やテーマの価値を守り、育てる立場から連携を図り、都市と市民生活との視点から、魅力と特徴につながるよう活動を続けることである。

また、常に地域の街づくりの動向や状況を把握し、新しい手法の開拓、内外他都市の事例等々の調査研究交流などを行い、常に新鮮な目をもって積極的な姿勢で取り組みを推進するエネルギーとすることも必要である。

そして、こうした活動や目的の意味や役割を、広く行政内外に認識し、理解してもらうことが必要であり、普及、啓発を含めた広報活動などにも気を配ることも重要である。

このように都市デザイン行政の取り組み方は、状況によっていろいろな方法が考えられる。



機会をとらえ、行動を起こすことによって、関係者が参加と協働する関係をつくりだすことが鍵である。